「京都会館」における洋舞公演に関する研究

瀧本真理

1　序文

日本では伝統芸能から前衛的な芸術まで、音楽・演劇・舞踊・演芸などのあらゆる公演芸術が同時代に共存している。その種類は多岐にわたり、重層的なために現状を全体的に把握することは、容易ではない。

1995年に発足された日本芸能実演家協議会「芸能文化情報センター」では、調査研究事業の一つとして「芸能白書」を作成し、芸能の全体像を把握するためのデータをまとめている。一方その傘下には自らの分野の状況をまとめた全日本舞踊連合による「舞踊年間」や、企業の芸能支援状況について企業メセナ協議会による「メセナ白書」も発行されている。

「芸能白書」「舞踊年間」ではアンケート調査や情報誌で公演記録の収集を行っているが、他に劇場で管理されている公演記録を収集する方法がある。その方法では、地域の特徴等が強く現れてくるのではないであろうか。本研究では、京都市にある「京都会館」で発行されている「催し物のお知らせ」から、情報を収集した。「京都会館」は第１ホール（2015席）、第２ホール（946席）、別館（300席）から構成される京都市では最大規模の会館である。

京都市は、都をどりや京舞、能や狂言など伝統的な芸能が盛んな土地である。その伝統芸能が盛んな地域で洋舞はどのような存在なのであろうか。

本研究では、「京都会館」に焦点をあて、洋舞公演に関して検討する事を目的とした。

2　研究の方法

「催し物のお知らせ」（434ヶ月分）から、各ジャンルごとに上演数をカウントした。ジャンルは24項目に分け、それ以外は「その他」又は「その他の舞踊」に入れた。また上演数は、一日に２回上演している場合は、「２」とした。

舞踊公演（邦舞も含む）に関しては、ジャンル、公演名、使用したホール、出演者、主催者、外来又は国内のものかを抜き出した。

38年間のうち、12ヶ月収集できた年を３年ごと（７期）に比較し、検討した。(1962年～64年を第Ⅰ期、65年～67年を第Ⅱ期、70年～72年を第Ⅲ期、76年～78年を第Ⅳ期、85年～87年を第Ⅴ期、88年～90年を第Ⅵ期、92年～94年を第Ⅶ期とした。)

集客を検討する為に、各ホールの座席数の60％を集客数と考え、７期を比較検討した。

3　結果と考察

434ヶ月の総上演数は24,902回であった。そのうち洋舞は1,344回（５％）であった。洋舞の内訳は、バレエ1,115回（83％）、民族118回（８％）、児童舞踊７回（１％）、モダン44回（３％）、ジャズ８回（１％）、学校舞踊31回（２％）であった。

洋舞公演全体の集客を考えると、第Ⅴ期がピークとなっているが、全体的には右上がりに上昇しており、今後も増加することが、見込める。

バレエの1,115回のうち、発表会は652回、公演463回、バレエ全体の58％が発表会であった。この数は「芸能白書」による全国の公演数61％と大同小異である。この事から「京都会館」でも全国と大差ない比率で発表会が行われていたと考えられる。

発表会を行った団体は55団体であり、そのうち62回を Max として、30回以上上演した団体は５団体であった。その他20～29回では７団体、10～19回では10団体、１～９回では33団体であった。

集客数の結果は第Ⅳ期（1976年～1978年）をピークとした山型となった。1970年には京都芸術文化会館が開館しているのにも関わらず、70年代半ばは、「京都会館」において盛んにバレエ発表会が行われていたと考えられる。

外来公演については、全体で185回、洋舞公演の14％にあたる。そのうちバレエが80回（43％）、民族舞踊74回（40％）、モダンダンス22回（12％）であった。ここで注目したいのが、民族舞踊の上演数であるが、これは1977年からほぼ毎年来日している「金剛山歌劇団」の35回が大きく影響している。この公演の主催が在日本朝鮮人の団体であることから、定期的な来日公演が可能となっていると考えられる。

外来公演の集客数においては、第Ⅲ期から連続して上昇し、第Ⅶ期がピークとなっている。

4　まとめ

①「京都会館」での洋舞公演の規模は、85～87年がピークで、近似曲線の傾き $a \geqq 0$ と正の値を示し、上昇していることがわかる。

②「京都会館」では、バレエ公演が中心となっているが、その58％は発表会であった。発表会は70年代半ばがピークで、近似曲線の傾き $a \geqq 0$ で正の値ではあるが、微増であることがわかる。

③「京都会館」での外来公演はバレエ、民族舞踊が中心であり、76年以降集客数が増加した。

5　展望

本研究では、京都会館のみの公演記録を検討したが、京都市全体の洋舞公演に関して検討するには他のホールの公演状況、他の都道府県との比較も考えていきたい。近年京都市では、座席数が500人～1000人のホールが増えており、バレエ以外のジャンルの公演の増加も期待できるため、今後も研究を深めて行きたい。